

2024年1月

## 課題本 『星の王子さま』

サン＝テグジュペリ/著 内藤濯/訳 岩波書店 2000年

### ◆◆◆1月の読書会から

先月の感想文を読んで振り返ることから始まりました。「いちばん」「幸せ」とはどういうことか、そこに思いをはせた人がいました。それぞれの人に物語があり、それはその人ただひとつの物語。何に幸福を感じるのかは人によって違う…。参加者の感想文を読んで思ったこと、考えたことが広がりさらに理解を深めることにつながったのではないのでしょうか。

今月の課題本は『星の王子さま』。世界中で読み継がれているお話です。読んだことがある人、初めて読む人、感じ方もそれぞれで今月もたくさんの意見が出ました。「たいせつなことは、目には見えない」などこの本にある有名なフレーズを代表として、現代にもつながる本質的なことが書いてありました。

(文責:森下)

2025年竹原読書会 1月『星の王子さま』 サン＝テグジュペリ 作

内藤 濯 訳 岩波書店

吉川五百枝

初めてこの本に出会ったのがいつだったのか覚えていないのです。1962年に出版されているので、最初に読んだのは20才くらいでしょうか。

初読からおよそ40年後に、このような感想文を書いています。

20歳頃、作者の名前も時代背景も意識せず、ただこの本の本文にぶつかった。記憶に残っている印象として「良い言葉に出会った」といううれしさがあったような気がする。それまで、形をなさず胸の内の憧れとして霧のかかった思念が、王子さまやキツネの言葉に出会って、「これだったのだ」とはっきり言葉として現れてきたのだ。理想という言葉は知っていても、その理想の内容を言葉としてつかみきれず、言葉にならぬからどんな空気に憧れていたのか自分でも解っていなかった若い時のことだ。「おとなは、だれも、はじめは子どもだった。(しかし、そのことを忘れずにいるおとなは、いくらもない。)」という献辞。キツネが「かんじんなことは目に見えない」とか「バラの花を大切に思ってるのはね、そのバラの花のために、ひまつぶしたからだよ」と言う内容。それらの言葉は、年を重ねた今では、あちこちでよくみかける言葉になっているので鮮烈でもないのだが、当時の私には、目指すものの混沌を言い当てた言葉として大切なものだったろう。納得できる言葉に出会った安心という気分が、微かだが今でも思い出される。

そして、1970年～80年代にかけて、私の周りに、海外からの翻訳児童文学が大波のように押し寄せました。訳者が海外に出かけ、自分のアンテナにかかった本を翻訳するという時

代です。国内では、河合隼雄氏を先導者としてユング派の研究者が「子ども」に注目し、私には、アリエスの「子どもの発見」日本版のように思えました。「子ども」を対象として論じる沢山の本が出版されています。

『夜間飛行』『人間の土地』などというこの作者の他作品を読んで、サン＝テグジュペリの周囲から彼に近づくこともしている。解説書やエピソード集など情報も増えた。周りの情報が増えるにつれて、若い時のように本文にストレートに参入したような読み方は出来なくなっていった。本自体も、アメリカ版とかフランス版とか、日本語が今風になっているとか出版事情も変わっている。今、作品を読み返すと、作者の経歴や戦争の時代背景が気に掛かるのだが、そうであっても、王子さまやキツネは、変わらずに「良い言葉」を語ってくれていることに違いは無い。

自分が子ども年齢に近いときは、おとなをアイロニーに満ちてながめても、どこかで線を引き、自分とは違う世界だと思えるから哀しさはない。王子さまが巡る6つの星のおとななんて、まだ子ども離れのしない私とは関係ないのである。それどころか、自分がやがて成るつもりのおとなとは似ても似つかないのだから、思い切り毒突いてもかまわないわけだ。善き者(王子さまやキツネ)とけなされる者(通常の人)とは、はっきり分かれていて、自分は、善き者の理解者側にいる。それが若いころの最初のこの本の読み方だった。

私はこの感想文を「子供のなるもの 宇宙的なるもの」という題で書いています。この当時、私の周りには、現代という時代のつまずきを、子ども達の存在を借りて明らかにしようとする考え方が心理学や文化人類学などの形で上がっていました。

この作品で言うところの「子ども」は、年齢が若い人という定義ではないようだ。「子どものような」とは、良くも悪くも、自分のみの感覚で満杯になっている状態に浸れることだろう。大人のようにブランドに左右されず、周囲に対して右顧左眄することなく、本質であると感得するものに忠実であることを善しとしている。童心を名付けて、純真とか無垢とか無邪気と呼ぶのはそういう面を言うのだろう。

小さな王子さまは、ウワバミの絵や、砂漠に隠れた井戸や、心で物を見ることなどを本質的なものとしてとらえている。その視点に立つと、「おとなは、よくわけをはなしてやらないとわからないものです」と言われる存在になるわけだ。

「宇宙から来た人」は、宇宙を自分の世界とするので、ブランドや数字に捕らわれない子どもの感得を象徴する言葉になるだろう。どこかの宇宙飛行士が、宇宙から見れば、どこにも国境の線は見えないと言った。そのような目が「子どものなるもの」なのではあるまいか。「子どものなるもの」な目は、帽子のようなウワバミの絵を通して、飲み込まれて実際には見えない中身の象を見ることが出来る。それ故、王子さまの最期は、形ある肉体を消して、地球人には見えない星の住人になっても不思議ではない。肉体という形を失くせば、すべてが終了したことになる「大人」と対比できる。

思えば、このことを語るためにどれほどの哲学や文学が生まれていることか。

「地球人のぼく」は、この世で一番美しく一番悲しい景色として、砂漠に引かれた2本の線とひとつの星の絵を示す。この絵は、悲しくて優しいだけだろうか。いや、地上では一番安定した表現ではないかと思う。人は消えていく。人影のない砂漠を通して存在の本質を見る。その本質を星に映して、なつかしく仰ぐのではないか。宇宙人になることの出来ない大人に

は、星が必要なのだ。

元の星に帰らなければならなかった王子さまと、作者サン・テグジュペリの最期とが重なってくる。飛行機乗りだった作者は、実体験として星と特殊な関係を持つことが出来たのではないかと思う。飛行姿勢によっては、空と陸とが逆転したこともあろうし、夜間飛行では、宇宙遊泳に近い感覚もあっただろう。地上の一般論に左右されない「宇宙的なもの」と隣り合わせだったと思える。サン・テグジュペリの操縦する飛行機の最後は、伝聞はあっても消息不明なままになっている。だが、今も人々に様々な象徴として読まれる作品が残る。こうして文学という宇宙に、人は、投影された存在の本質を求めて、好みの星を見つけるのだ。

上記の感想文からまた、20年近くが過ぎた2024年。今も『星の王子さま』は変わらずに店頭にあります。初めて読んだ時に納得した王子様とキツネの「良い言葉」も変わることはありません。そして、宇宙の広大さへの驚きは、広まるばかりです。

改めて以前の感想文を読むと、今、自分の中で「子どものなるもの」と言えなくなっているのに気が付きます。大人になって長い時が過ぎる間に、私が、「初めは子どもだったこと」を忘れていたのでしょうか。それとも、今、「子ども」は、以前より早く「大人」になって、自分の成りたい「おとな」を見定める暇などなくなっているのでしょうか。それとも、社会全体が「タイパ」「コスパ」や「機械論」に追われているのでしょうか。もしかしたら、本当に献辞に書かれたように、「子どものなるもの」からの見方を忘れた大人集団になっているのかもしれない。

## 『星の王子さま』を読んで

### ◆【 ZK 】

私の家に10代あの頃から本棚にありながらも読んだことがありませんでした。いつの間にか古本屋に行っていました。表紙の絵がフランスっぽく洒落ています。なんかブランド物のように扱ってしまって本棚にあることだけでも良かった気分でした。それですから、読んでなくても読んだ気になっていました。

今回読書会で改めて向き合うことになりました。しかし大人が読んでも難しく大人の絵本みたいに感じました。

大人の価値観にたいしての風刺みたいに感じました。わかりにくい時はあとがきから読んでから良いときいたので早速あとがきを読みました。

先月の本に関連してユダヤ人とかの戦争の時代の作者が親友に当てた慰めとか励ましの物語でした。

そして飛行機に関心もあり飛行士としての仕事もしていたのでこのような物語が浮かんだのでしょう。

頻繁に出てくる言葉が目に見えないものが実は大切でそこに人は気づかなければならいと。人が感情的にも精神的にも必要なことを物語を通して描かれているのでしょう。

どんなに社会が発達しても人間に必要なことは人間が自発的に表していかないと満たされないのでしょう。しかし政治とか支配者の圧力のあるもとでは難しいのでしょう。

目に見えない人の心のひだに目をとめて自己表現できるようになったら良いと思った本でした。

### ◆【 JM 】

注釈本の類いが好きではない。(もちろん古典においてはこれなしでは読めないが)「○○は△△の象徴、□は☆を比喻している」と言われても「ホンマかいな」と思ってしまう。天の邪鬼なのである。

この本には挿し絵があるので、王子さまの姿形やバオバオの木の様子などはそれに添わなければならないが、あとは自由であると思う。自由でありたいと思う。作者がこう読んでほしいと思うなら、当然そのような誘い込みを作品の中に仕込んでいるだろう。あとは読者に委ねていると信じる。100人が読めば100人の読み方があり、他の読み方を批判するのはおこがましい。(と思う)

隣りに人がいても分かり合えず孤独を感じることはある。分かり合える人たちに囲まれている人の方が少ないだろう。多くの人が孤独を抱えながら生きている。小さな星に住む孤独な王子さまにとっての花の存在、思いがけず砂漠に不時着したパイロットとの出会い、どちらも貴重なものだ。「王子さま、出会えてよかったね」と思う。

読書会で「王子さまは毒蛇に噛まれて死んだ」という話が出て驚いた。私自身は全くその読みはしていなかった。王子さまは星に帰ったのだと思っていた。だって星から星へテレポテーションできちゃう王子さまですよ、毒蛇ごときにやられるはずはない・・・と思っていた。へえ～っである。だから読書会はおもしろい。といっても自説を曲げることなく、今でも見上げる星々の中の1つに王子さまは住み、薔薇に嫌味を言われながらも幸せに過ごしていると思っ

ている。出会えたことに喜びを感じ、前より一層愛情を持って水やりをしているだろう。この地球に住む私という存在にも、今までいろいろな出会いがあった。「出会う」ってすごいことなんだなあと思う。その出会いに感謝しかない。

### ◆【 T 】

泣いている王子のところに現れたキツネが「仲よくなる」ってどういうことか教えてくれた。それによると、「仲よくなる」とは、あるものを他のものとは違って特別なものだと考えるようになること。他のものより時間をかけて少しずつ分かり合っていくこと、そうすると、お互いに離れられなくなり、かけがえのないものになる。この世でたった一人の人・たった一つの物になっていくということ。キツネが王子さまと仲よくなると、別れた後も王子さまを思い出し、金色の麦や麦を吹く風の音にも幸せを感じるようになることだという。これを聞いた王子さまは、自分の星に残してきたバラの花のことを思い出した。水をかけ、覆いやガラスをかけ、毛虫も取ってやり、不平や自慢話も聞いてやったバラの花がとても大切な花で、自分にとって一番の花だと気づいた。

世の中には、美しいもの・きらびやかなものは沢山あるが、それよりも時間をかけて紡いできた絆や友情の大切さを言っているのかな？目の前にいなくても思い出すたびに幸せになったり、温かい気持ちになったりすることが仲よくなることなんだろうな。

もうひとつ、キツネが教えてくれたこと。それは、「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないということ。かんじんなことは目に見えないということ」だ。これは、さっきの絆や友情のことを言っているのだろう、あるいは、そのものの本質ということだろうか。それは、心で感じるものであって、目には見えないがとても大切なもので人間を幸せにするものだ。

先日、テレビ番組でイチローと松井秀喜の対談を見た。二人ともメジャーリーグで大活躍した野球選手だが、今のメジャーリーグについて気がかりな点があるという。あまりにデータ野球に偏りすぎているのではないかと。弾道、ピッチャーの癖や配球の特徴あるいは野手の守備のやり方などが全て統計を取り、データ化され見れるようになった。そのデータに従って野球をしなければいけなくなっているという。しかし、それが全てではないのではないかとというのが二人の考えで、データとして現れないところや見えないところも大切と考えていて、データを重視すると「感性」が失われると言っていた。

見えないものに気づく心や感性が、そのものの本質を極めることになるということだと思う。

## ◆【 N2 】

幼い頃から「星の王子さま」の名前は知っていたのですが、実際読んだのは十代初めの小学生の頃だったと思います。日本では1953年に初めて翻訳されていますので、生まれた頃から誰かが読んでその題名を口に出したのを耳にしていたのでしょ。

最初に読んだときは内藤濯氏の翻訳で、訳の日本語も難しくてなかなかずっと頭に入ってきませんでした。地球にやって来た王子さまが砂漠でパイロットの僕と出会い、また自分の星に帰って行ったお話として、「ふーんそうなの」、と思う程度でした。しかし稲垣直樹訳で読み直すとさらに理解が深まりました。

年を経て再読するとそのたびに発見が多く、抽象的な言葉や、いろんな場面に何層もの意味が仕掛けてあるのでしょうか、いろんな解釈が出来てしまうのです。

その後、作品を書いた時代背景やサンテグジュペリの生涯などを知り、それを重ね合わせると作品に込められた意味がさらに複雑であることがわかりました。キツネや転轍夫の言葉の意味の深さや、地理学者や王様や酒飲みの言葉には滑稽さを見つけました。

この本は読み始める前にチェックが入ります。描いた絵を帽子と見るか、ゾウをお腹に飲み込んだボアと見るかで子供の頃を忘れた大人であるか、まだ子供心を持っている大人であるか。物事の表面を見て判断するか、本質的なことの質を直感でとらえられるか。王様の星や、うぬぼれやや、実業家などの星を離れるときに、王子さまは変なおとなと感じるのですが、読んでいる私もクスッと笑って本当だと思ってしまうのは子供心に返っているからでしょうか。

サンテグジュペリは第二次世界大戦時に空軍の偵察飛行機に乗り、フランスのドイツ降伏を機にアメリカへ亡命した後、再度自由フランス空軍の偵察部隊へ復帰し、そのまま消息を

絶ってしまいました。この小説は戦時下で書かれているのですが、戦争の場面は全く無くサハラ砂漠に不時着したときに会った王子さまを通して、人と人の繋がり大切さ、かけがえのなさを教えてくれています。

王子さまの話はヒツジに始まり、ヒツジで終わるのですが、口輪に革紐の付いていないヒツジはバラを食べてしまったのでしょうか。食べていなければ満天の星がニコニコ笑うでしょうし、食べてしまったら夜空の鈴という鈴がみんな涙に変わるのです。どこかわからない星でヒツジが花を食べたか食べないかの判断は自分の考え方一つで決まり、すっかり夜空(世界)の景色が(見方が)変わってしまうのです。

この本は私には本当に難しいのですが、読めば読むほど、いろんな解釈が出来るし物の見方は一つでは無い、帽子を描いた絵とみるか、ゾウを飲み込んだボアの絵とは見えないのか、大人目で見ると子供目で見ると、見方一つとってもどちらが正しいとは言えないのです。自分の見たい様に見れば良いと思うと、再読を重ねる度に抽象的な表現を解釈するのが謎解きのように面白くなってきます。

## ◆【 KH 】

作者は、サハラ砂漠に不時着する事故(1935年)に会い、5日間砂漠をさまよった。その際の体験を語って、～人間は地図もなく方角も分からないところをさまよると、蜃気楼を一番に信じ、行動するようになる～というような記述がある。星の王子さまは、遭難中に見た蜃気楼(これまた、実在しないものではないか)目に見えない(本当にはないもの)が結晶して生まれた傑作ということになるのだろうか。

事故を起こすまで、親身になって話をする相手がまるきり見つからず、一人きりで生活していたと記す作者。

一人ぼっちで砂漠の中で眠る作者の元へ、同じくひとりぼっちの小さな少年が、宇宙から降りてくる。

出会いから5日目。王子さまは、自分の星でわがままな薔薇の花と仲違いして、地球にやってきたことがわかる。もう自分の星には帰らない覚悟で。

バラの花もそれを察していた。「ごめんなさい。お幸せでね」

もう他所へ行くことにおきめになったのだから、行っておしまいなさい、さっさと！」

弱みを見せるのが嫌いな花。

美しく、芳しい香りを放つ1輪のバラを見た時、王子様の心はさぞやときめいたに違いない。

でも、美しいバラの言葉のとげに、繊細な心を傷つけられたのが王子さま。

バラのモデルは、サン=テグジュペリの妻だとの説もあるが、ここでは棚にあげておきたい。

## 6番目の星

住人の地理学者は「わたちは、いつまでもかわらないことを書くんだよ。」しかも現地に見にいったりはしないと。

「花っていうものははかないものなんだからね。」

「はかないってなんのこと？」「そのうち消えてなくなるっていう意味だよ。」

目に見えることもものはいつまでも変わらず、目に見えないもの、そのうち消えて無くなるものには価値がない。大変にわかりやすいアンチテーゼを示してくれる地理学者。

消えて無くなるもの。人の命もしかり。言葉もしかり。いや、発せられた言葉そのものは、記録すれば残る。ただ、言葉を発した人の想いが、そのまま受け手に届くとは限らない。届かない、行き違いだらけだ。

地理学者に、地球へ行くといいと勧められ、7番目の星。地球へここで、作者と出会うことになる。

## 7番目の星 地球

### ●へびとのであい

地球にとっても(砂漠)にやってきて空を見上げながら、王子様が呟いたこと。

『星が光っているのは、みんながいつか自分の星に帰っていけるためのかなあ』

自分の星が、宇宙のどこかにあり、生命はいずれ宇宙のどこか(わたし的には自分だけの星というよりも大きな生命体)へ還っていくのだったら、死ぬことは怖くない“気がする”。

『ぼくの星をごらん。ちょうど真上に光っているよ……。だけどなんて遠いんだろう！』

あんたを遠くに運んでいくことにかげちゃ、船なんか俺にかなやしないよと蛇。

あんたの星が懐かしくてたまらなくなつて、帰りたくなつたら、俺があんたをなんとか助けてやるよ。この蛇は、ラストに登場して、見事に伏線を回収して、砂の中に消える。

### ●五千ほどもあるバラとのであい

この世にたったひとつの珍しい花を持っているつもりだった王子様。ところが実は当たり前のバラの花をひとつもってるきりだった。あと膝の高さしかない三つの火山、ぼくはこれじゃ、えらい王さまになんかなれようがない。王子様は、草の上に突っ伏して泣きました。

存在の孤独 というか地理学者のいう価値の変わらないもの、絶対なものなんてないんだよという作者からのメッセージを感じる。

### ●狐とのであい

飼いならすすってそれ何のこと？ 仲良くなる っていうこと

あんたが俺を飼いならすと、俺たちは、もう、お互いに、離れちゃいられなくなるよ。あんたは俺にとってこの世でたった一人の人になるし、俺は、あんたにとって掛け替えのない、物になるんだよ。

狐と別れてもう一度、バラの花たちを見にいった王子様

あんたたちは美しいけど、ただ咲いているだけなんだね。

ぼくのバラの花、あの一輪の花がぼくにはあんたちみんなよりも大切なんだ。

狐

心で見なくちゃ、物事はよく見えないってことさ。かんじんなことは目に見えないんだよ。

面倒を見た相手にはいつまでも責任があるんだ。人間っていうものはこの大切なことを忘れてるんだよ。

ぼくの飛行機が砂漠の中で故障してから8日目。

飲み水が1滴もなくなった。

#### 【水を探す場面】

何時間か黙って歩いていると、日がくれて、星が光り始めた。

「水は、心にもいいものかもしれないな。」

「星があんなに美しいのも、目に見えない花が一つあるからなんだよ」

「砂漠は美しいな……」

「砂漠が美しいのは、どこかに井戸を隠しているからだよ」

「とつぜん、ぼくは、砂がそんな風にふしぎに光るわけがわかっておどろきました。」

#### 【別れの場面】

「ぼくはあの星の中の一つに住むんだ。そのひとつの星の中で笑うんだ。だから、きみが夜、空を眺めたら、星がみんな笑ってるように見えるだろう。すると、君だけが、笑い上戸の星を見るわけさ。」

水を探しながら王子様が、語る場面から、ラストまで。何と素敵な、何と心癒される別れの場面だろう。改めて、この作品を読んで、二人の会話、交わされる言葉は、まるで水晶のようにキラキラと輝き、心に深くしみわたってくることに驚いた。

最後に、献辞について(はじめに書くべきだったかもしれないが)

まず珍しいなと思ったのは、献詞に書かれた、畳み掛けるような3つの言いわけ。

1、そのおとなのひと(つまりレオン・ウェルト)は第1の親友だからである。

ネットから得た情報をかいつまんで記すと、二人は、第1次世界大戦から第2次世界大戦にかけての激動の時代を生きたわけだが、あまり共通点はなかったとある。年は22歳も違う(ウェルトの方が年上)。フランスの社会や拝金主義や、世の中の流れに必死で抗い、言葉による抗議を尽くしたウェルト。そのウェルトのジャーナリズムを称賛していたのがサン=テグジュペリだという。彼にとってはお師匠さんの存在だったわけだ。

2、そのおとなの人は、子どもの本でもなんでもわかる人だからである。

星の王子さまは、彼の他の作品とは違う。優しく、シンプルな言葉で書かれていて、終盤思わず涙ぐまずにはいられない美しいお話として、私も読んだのは確かだけれど、深く読み込もうとすればいくらでも、人の真実に迫る、哲学の書とも言える。まさに訳者の山崎 庸一郎氏が書かれた通り、星の王子さまには『我々が己を深く反省する時、まだ多く、しかもかけがえのない形で残されているようです』

一見優しい、この物語の“言葉”に意味を見出し、作者からのメッセージを受け取るのは読者それぞれ。心を耕せば耕すほどに、新たなメッセージに気づく。

3、その大人の方は、いまフランスに住んでいて、ひもじい思いや、寒い思いをしている人だからである。どうしても慰めなければならないひとだからである。

こんなたたみ掛けるような“言い訳”の献詞をかつて読んだことがないような気がする。

サン=テグジュペリにとってウェルトがどれだけ大切な友人だったか、察することができる。



たとえ 22 歳年が違っても、いわゆる親友のように頻繁に行き来できる状況ではなく、お互いの著作を通じてしか、交流は持てなかったとしても。

さらに、ウェルトはユダヤ人として、登録させられ、3の言い訳にもあるように、大変厳しい生活を強いられていた。ウェルトの『33日間』は、フランス陥落時のウェルト一家のパリ脱出回想録だそうだが、彼は、この原稿を 1940 年10月に、サン=テグジュペリに託し、アメリカでの出版を依頼した。残念ながら、出版は叶わなかったそうだ。このように、明日の命が保証されない状況の中で結ばれた絆はかたい。おそらく死を覚悟の上での、ラストフライトとなった飛行で、サン=テグジュペリも輝く星になった。【彼は結局、フランスを目指して偵察飛行中にドイツ軍(ナチス)によって撃墜される】

関係性ができると、大切なものになる。

バラ 井戸の水、ともだち

王子様は言う。「水は心にもいいのかもしれない」サン=テグジュペリ最後の手紙にあった“人間の砂漠” 砂漠のように、乾ききった人間の心を癒す“いい水”

めんどうを見た相手には、いつまでも責任があるんだ。守らなけりゃならない。

祖国を、家族を、友人を守らなけりゃならない。

狐「かわりをもったものには、責任を持たねばならない」ここで語られているのは倫理観や道徳感なのだろうか。

関わりを持ったから、面倒を見たから 責任を感じて星へ帰ったのか？

ねばならない(責任)ではなく、1本きりのバラは、王子さまにとってかけがえのない、特別なもの。理屈を脇に置いて、どうしようもなくバラを愛おしいと思う純粋な心が王子様を自分の星に帰ろうと決意させたのだと思う。自分にとってかけがえのないものが何か、究極の答えはすぐに出てこない。

蛇との約束

はかない花の待つ、小さな星へ。1年後、自分の星が真上に来る晩に、王子様はキラキラと輝く星になった。なんとロマンチック。

ロマンティシズムは夢見心地な心に宿るのでなく、ギリギリの極限まで突き詰めた状況でこそ出現するのかもしれない。大切なことは、目に見えない。

## ◆ 【 望月悦子 】

今回の課題本「星の王子さま」、フランス語原題:Le Petit Prince、英語: The Little Prince は、フランス人の飛行士・小説家であるアントワーヌ・ド・サン=テグジュペリの小説で、1943 年 4 月 6 日にアメリカで出版され、初版以来、200 以上の国と地域の言葉に翻訳されている小説。若い頃に読んだときは、一つ一つの物語としてさらっと納得して終わっただけであった。今回は文中の、「ウワバミ」「象」「帽子」などは何を比喩的表現としているのかを読み解いてみたいと思った。

作品の冒頭「おとなは、だれも、はじめは子どもだった。(しかし、そのことを忘れずにいる

おとなは、いくらもない。)」とあるように、この作品は、子供の心を忘れてしまった大人に向けたものである。と言われるように心新たに改めて読み返してみたいと思う。

そもそも冒頭の献辞したレオン・ウェルトとは誰なのか。調べてみると、1931年頃出会った22歳年上の親友であったようだ。サン＝テグジュペリの『ある人質への手紙』には、ウェルトのジャーナリズムへの賛辞が含まれており、パリ大学フランス文学名誉教授のフランソワーズ・ジェルボドは、本文の注釈の中で、ウェルトがサン＝テグジュペリの文学における師匠であり、平和主義者で、ナチス・ドイツの弾圧対象となっていたユダヤ人であったため、1941年7月ユダヤ人としての登録を義務づけられている。ドイツ軍に捕まれば命を失う可能性もある危険な生活をしたようで、前回の課題本「世界で一番幸せな男」の作者エディ・ジェイクと同じ時代同じような境遇だったようである。第二次世界大戦がはじまったころ、サン＝テグジュペリはニューヨークへ。ウェルトは南仏に逃れ密かに生活していたようだ。海外からドイツが行っていることを冷静に見つめ、「ぼく」という一人称で優しい語り口をとりながら、内容は揶揄しながら厳しく批判していることが分かった。

ウワバミが「えもの」を飲み込もうとしているグロテスクな絵、これには「ウワバミというものは、その「えもの」をかまわずに、まるごと、ペロリと飲み込む。すると、もう動けなくなって、半年の間眠っているが、その間に、飲み込んだ「えもの」が、腹の中でこなれるのである(P7)」これはまさに強制収容所(ウワバミがナチスドイツ、えものがユダヤ人)の生活と同じではないか。「僕が書いたのは帽子ではありません。ゾウをこなしているウワバミの絵です。・・・大人の人ときたら自分たちだけでは、何一つわからないのです(P8)」ここからも民衆はなにひとつ分からないから、ナチ党・ヒトラーに傾倒し競って親衛隊にも参加していることを皮肉っているのだろうか。分かれようともしないで時代の流れに逆らうことなど考えていないことを批判しているように思える。「ここで王子様しているのは、彼を忘れないためなのです。友達を忘れるなんて、悲しいことですからね(P27)」ここでもエディ・ジェイクと同じように友達の大切さを強調している。友というのは冒頭出てくるレオン・ウェルトのことを言っているのだろうか。「種のときは人の目には見えないものです。地面の下の隠れたところで種は眠っている(P37)」悪い植物だったら分かったときにすぐ引き抜かなければいけませんと。バオバオが大きくなったら手遅れになり打つ手が無くなることなどと簡素で美しい語り口。表現はやさしいが、ヒトラーやナチ党員のことを注視し皮肉り警告しているのではないか。二番目の星「見栄っ張りの自惚れ男」や三番目の星の「飲んだくれ男」では優しい語り口がおかしさを倍増してしまう。その果てに「大人ってやっぱり絶対にすぐくへんだよ」と優しい可愛い可愛い表現で揶揄している。四番目の星「実業家の男」には「大人って、もうほんとうに、ものすぐくへんだよ」怒りに転じている。このように戦時中の不安や絶望感の中人間の愚かさを、効率ばかり求める戦争の儚さや無駄なことなどを鋭い風刺で批評をしている。そうしながら五番目の星では、ゆっくり歩くことの大切さや「価値のないことをしている」と人から軽蔑されているが人のために尽くすことの大切さなど人間が本来もっている価値観をさらっと彷彿させている。七番目の星「地球」ではフェネックキツネのことば「なつくってのは心を寄せること。自ら心を寄せたものでなければ、何も知ることはできないよ。友達をつくるには辛抱がいる しきたりがある。心でしかものは見えないんだよ。本当に大切なものは目に見えないんだ。きみのバラが、きみにとってそんなにも大切なのは、きみが彼女のためにつくした時間のせいだよ。きみはきみの心に

寄せたものに対して、いつまでも責任を負うんだ。きみのバラに責任がある」などからも人として生きることや人の命を守ることの重要性、人間関係の厳しさや愛溢れる優しさが大切であることなどを強調している。第2次世界大戦という時代背景からだけで「それぞれができることを、それぞれに要求せねばならないこと」「権威というものは、理屈にかなうことで成り立つこと」「他人を裁くよりも、自分を裁く方が難しいこと」等々読み解いていたが、作者のサハラ砂漠に墜落した時の実体験があったからこそ「砂漠が美しいのは、どこかに水をたたえた井戸を隠しているからだよ。家でも星でも砂漠でも、その美しいところは、目に見えないのさ」という発想が生まれたのか。どれほど飢えと渇きと孤独に苛まれたことだろう。ドリアン助川訳の「星の王子さま」のあとがきによると、作者は仲の良かった5人きょうだいの弟と姉を病気で失っている。だからなのか、「王子様が眠り始めたので私は彼を抱えまた歩き出した。壊れやすい宝物を抱えて歩いているような気持ち。この地球上で、王子様よりも壊れやすいものはない。月明かりの下で、私は王子様の青白い額や、閉じられた目、風に揺れている髪のみさ……」ここでも作者の実体験による弟の命を失った時の様子がリアルに表現されていたのか。と思えた。

戦争の悲惨さ、愚かさ、無益な行動などはいつになったら無くなるのだろう。課題本の翻訳者内藤濯は、あとがきに「アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリをこの高度の童話を書いた人」と紹介し、「童話の城を超えている童話は、かつての童心に生きている大人でなくては、歯が立ちようのない類です」と言い切っている。

内藤濯の翻訳は、「平安朝の物語文学には、今日の句読点などはなかった。言葉を生かす道が、読む人それぞれの息遣いにある。この日本語訳でそういう言葉の本道を狙った」と書いている。そういう視点で読み解いていくこともあるのかと改めて教えられた。

たまたまドリアン助川訳の課題本を見つけ、読んでみると翻訳者の個性が見えて面白かった。作者の意図だけではなく、翻訳者の意図も比較ができるので時間があれば、読み比べてみるのもありかなと思わせてくれた今月の課題本でした。

## ◆【 MM 】

読んだことがあると思っていたのにその時の感情が思い出せず、ほかの方の話にもあったように有名すぎて読んだ気になっていたのかもしれない。今回初めての気持ちで読んだ。特に終わり近くは泣いてしまうくらい感動した。読書は読むたびに感じ方が違うのはよくあることだが、この本は文字通り子供から大人まで楽しめる物語だと思った。

王子さまに会うまでの ぼく は一枚の絵(うわばみと象)を大人に見せるたび大人への落胆を感じていた。その絵を見た大人の反応をみて大人への対応を変えていた。まだわかってくれそうな人には会えていない。

王子さまと出会って ぼく はいろいろなことを感じます、知ります。王子さまがいた星は小さくて日の入りが1日のうち何回もくると。王子さまは悲しくなると日の入りが見たくなること。日の入りを1日で44回も見た、ということはそういう悲しい気持ちになることがたくさんあったこと…。王子さまは「そうだ」とも「そうでない」とも言わないけれど ぼく は王子さまの気持ちを

想像する。

王子さまが自分の星を離れてからいろんな星に行つて、そこであつた人たちのことを ぼく は聞きます。権力にとらわれている王さま、褒められることに執着するうぬぼれ男、本から得た知識だけで何も見たことがない地理学者…。地理学者からすすめられて地球にたどり着いた王子さまは へび、バラの花、キツネたちと会い、 ぼく にも出会うのです。

地球で見たたくさんのバラと王子さまの星にいた4つのとげをもつバラ、今まであつたキツネと友達になつたキツネの違いは何だろう。それはたった一輪、一匹、一人、代わりがきかない、かけがえがないということ。かけがえがない存在になつたのはどうしてだろう。それは手をかけたこともあるし、話をしてお互いの心の交流があつたからではないか。 ぼく にとつての王子さまもそのかけがえのない一人となつた。王子さまにとつても ぼく は特別な友達でしょう。

私が感動したのは、王子さまの星にいたバラ、地球で出会つたへび、キツネ、ぼく、そして王子さま自身の他の人を思いやる気持ちが見えたからです。バラは嫌なことを言つて王子さまを冒険へ出す手助けをした。「おしあわせでね…」と祈りながら。へびは王子さまが帰りたい場所へ戻してくれた。王子さまが死ぬことによつて友達も失うけれどへびは王子さまが望むようにしてくれた。キツネも意地悪なことを言つたけれどたいせつなことを王子さまに教えてくれた。 ぼく は出会つたときから王子さまの話を面白がつて聞いた。そして理解しようとした。離れるのは悲しいけれど、会えなくても「ある」、「いる」ということを知つた。王子さまも ぼく と分かり合おうとした。そして ぼく にも大切なことを教えてくれた。

人に思いをはせること、それは想像すること、自分以外の視点をもつということ。今月の課題本の当番からもらった資料から作者のサン＝テグジュペリは小さいころから飛ぶことに情熱をもち実際に飛行士として空を飛び、事故から何度も死に直面していることを知つた。空を飛ぶと単純に視点が変わる。視点が変わると新たな見方ができる。死を身近に感じる体験も新たな考えが加わる大きなきっかけになつてゐるのではないか。作者が思つてゐることを子供でも楽しめるお話にした。そして大人にはたとえ話の中に大切なことを感じさせる話となつてゐる。課題本と出会つたから感動を受け取ることができた。そして吉川先生をはじめ参加者みなさんのお話や考えに触れることで私の見方も広がっていく。この考え方を知る前と後では本当に生き方も変わってくる。この機会が毎月持つてゐることをありがたく思う。